

美容実践教育における評価に関する研究

—構成主義的評価システムを中心として—

富金原 光 秀

Study on the Evaluation in Beauty Practice Education

— Configuration and Principle Evaluation System as the Center —

FUKINBARA Mitsuhide

キーワード：教育評価、真正評価、ポートフォリオ評価

はじめに

近年、教育の現場に対する社会の要請が変化している。「情報公開」や「説明責任」といった言葉に表されているように、学校現場が自らの持つ情報を開示し、存在理由の説明を求められるようになってきている。それに加えて、第三者による外部評価も現実のものとなりつつある。周知のように現在の状況を踏まえれば、「情報公開法」や「個人情報保護法」を含む、高等教育機関のアカウントビリティを果たす役割が強く求められてきている。その中核には各学校が内部的に改善目的で行う自己評価があり、自己評価の信頼性、透明性を高めるために外部評価をあわせて行うことが想定されている。学校教育法第52条によれば、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」と明記されており、このことから伺い知れるように、評価研究や教授活動を含む教育研究に寄与し、検証を行っていくことがアカウントビリティを果たしていくひとつのメルクマールとなっている。このように今後において高等教育機関に求められるアカウントビリティは、より強く求められ、教育者・研究者として教育活動や研究活動におけ

る社会に対する説明責任を伴うこととなる¹⁾。そのような流れの中で、教育活動に即した学習者への評価理論の構築と評価実践の評価活動の改善プロセスと関係者の役割を明確化していき、つまりは信頼される教育の場となるようにしていく為の評価システムが必要であるという認識に至った。

文部科学省は「各専攻分野を通じて培う「学士力（仮称）」～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～」²⁾として以下の項目を挙げている。

□汎用的技能

・知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

コミュニケーション：読み・書き・聞き・話すスキル

数量的スキル：自然や社会的事象について表現する力

情報リテラシー：多様な情報を適正に判断し、効果的に活用する

論理的思考力：情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる

問題解決力：問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる

□態度・志向性

自己管理能力：自らを律して行動できる。他者との協調・協働して行動できる

倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。社会の発展

のために積極的に関与できる

生涯学習力：卒業後も自律・自立して学習できる
□統合的学習経験と創造的思考力

獲得した知識と技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題に適用し、解決する能力

昨今、PISAの国際評価が世間を賑わせているが、その学力基準に関して、フィンランドの教育改革に実際に関わった経験を持つ中島博は「OECDがPISAで測定しようとしたのは、21世紀に求められるリテラシーであって旧来の「学力」のみならず、「教科書の枠を横断しての能力、それをクロス・カリキュラム・コンピタンスとして捉えて、①問題解決、②批判的思考、③コミュニケーション能力、④自信、そういう能力がこれからの時代に大事であり、それらを含め国際的に研究がすすめられている」³⁾と述べている。このように、上記で示した学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針に加えて、PISAの①問題解決、②批判的思考、③コミュニケーション能力、④自信、に至るこれらを踏まえた評価活動の在り方は、今後求める未来へのあるべき姿である一つの方向性を示していることになろう。これらを踏まえた上で、具体的にどのような方法と研究で授業の検討・評価方法を改善する必要があるのか。その適切な評価を行うには、教育目標を明確に設定すると同時に教育方法および評価の方法やその学習段階の検討が欠かせないと筆者は考えている。これについてブルームによる評価の方法を考察してみると、以下の3つに分類される。第1番目としてその活動の開始以前にその活動の企画をもっとも適切なものとするために必要な評価を行うとしている「事前的评价」、第2番目にはその活動の途上において、その活動をもっとも効果的なものとするように活動自体を軌道修正するために必要な評価を行う「形成的評価」、第3番目はその活動が一段落した時点でその活動の成果を把握するために必要な評価を行う「統括的评价」を適用し、以上3つの教育活動による分析と考察が教育評価の前提条件（第一の根拠・理由・裏づけ）であることとしている。そして、ブルームは、「評

価とは、実際にある変化が起こっているかどうか、またその変化の量や程度はどのくらいかを明らかにするためのデータを体系的に収集することである。」⁴⁾と述べている。

評価に関する概要

そもそも研究目的で評価を問題にするには、できるだけ精度の高い多くの情報が必要となる。それは教授—学習の過程における評価が妥当性や信頼性のあるものでなければならぬことを根拠としている。

現在の美容の基礎的技術における評価は、国家試験に対応できる基礎的技術獲得をその軸としており、それに応じて学習者の成績をつけていくことが中心となっている。今後美容教育では、それと併用して美容の実践能力を教育目標にかかげ、現場での一連性ある技術の評価と省察、記録類・姿勢に至る評価を取り入れていく必要がある。その際に「美容の実践力とは何か」ということを基盤として再考し、そのうえで学習（教授—学習過程）面の評価では、多面的な内容から精選した教育目標の設定、教育方法、学習者の自己評価などに考察を加えていく。現場環境を踏まえた実践的実習授業は複雑さを内包しているので、学習者を評価していく際には、その内容面において多様な評価が求められる。現象を鑑賞する能力、状況判断能力、態度や意欲に関する内容など幅広く問題化していく必要がある。それには、多様な内容に見合う妥当性のある方法を多方面から考察・選択し、多角的な情報を収集する事前の計画立案が必要となる。いうまでもなく、美容実践教育は美容の実践力を目標としているので、学習者に対する評価内容は、顧客やクライアントに対して行う美容技術を中心とした実践能力、それに必要な理論的理解、創造力、コミュニケーション能力に至る内容を含んだものとなる。

現状把握として、現在の美容師養成施設における評価を大別すると、学習者が国家試験課題等の特定の課題をどの程度成就しているかについて学

習者を全体的な比較において捉え、評価していく相対的評価と、学習者の課題に対する達成状況を内容に照らして詳細に問題化する絶対的評価の二つに大別できる。そのうち、絶対評価の評価尺度が国家試験の採点項目に記載されているので、その外的基準によって評価法が定められている。カットティングやオールウェーブ等、美容実習の実技試験や、筆記試験の際にも同様に絶対評価基準に従い、定期試験では、「60点以下は不可」といった事項に当てはめていく。学内における美容師国家資格実技課題の可否に関わる評価結果は、必要な履修科目の認定に関わるものであり、国家試験基準に基づき、絶対評価を取り入れることが前提となる。実技試験の成績順位や、衛生面、その他の試験態度など詳細に関わる事項は場合によって相対評価も視野に考えられるが、最終判断は絶対評価が設定されている。その為、仮に科目終了時の合格ラインを60点とするのであれば、評価にあたって60点の意味について明らかにする必要がある。つまりは、課題内容の評価尺度によって客観性の高い評価ができるものと、経験的に過去の課題と比較して判断したりしなければならないことがある。実習授業などにおいても、仕上がった作品などを評価する際、教員によって若干の感覚の差異や認識のズレが生じてくる為、必ずしも絶対評価ができるように教育目標ないし評価基準が十分に検討されているとは限らず、詳細な位置づけを把握しきれないまま相対的評価の考え方に移行していることも少なくない。ましてや、後述する実践的教育力や創造性、表現力などに関しては尙のことである。目標に到達したかどうかを図るいわば到達度評価については、評価可能な目標が数値化され、明確になっていなければその妥当性や客観性を確保できない。その解決に向けた検討を行っていくことは必須の課題である。

構成主義的評価システムの検討

教育評価研究においては、歴史的に評価方法の開発のみならず、評価方法が適切であるかどうか

ということについて議論されてきており、前述したように、伝統的には妥当性・信頼性・客観性・個別性等がその規準とされている。

これまでの教育活動の評価における方法の展開とともに、まずはその妥当性・信頼性・客観性・個別性の展開を整理していく。その上で、従来の伝統的評価のあり方に対して、近年において注目されている構成主義的な評価をとりあげて、その評価の考え方を概観していく。そしてその構成主義的な評価を検討し、その妥当性・信頼性・客観性及び個別性に至る判断規準を考察していく。

教育評価を適切なものにするには、評価に関する理論的な見解をもつことが前提となるが、その1番目として妥当性があげられる。この妥当性とは、評価目標と評価結果との関連性が高いことを示すもので、妥当性にはさまざまな観点が挙げられ、内容面からみた妥当性・規準からみた妥当性・構成概念面からみた妥当性等に分けられる。2番目として信頼性があげられる。信頼性は測定の一貫性あるいは安定性を意味し、何回はかっても、だれが確認しても、類似の結果を示すことができるものである⁵⁾。信頼性については絶対評価を行う場合はその評価規準を明確にすることによって確保していく。仮に採点が主観的であれば信頼性は低くなるので、できるだけ客観的な採点ができるような方法を選び、採点者の個人的な偏見や判断に影響されないようにしなければならない。この際にも明確な採点基準を設定して採点することが望ましい。3番目としてあげられるのは、客観性である。客観性は、問題の正答や合否に関する意見が一致する度合いをいう。すなわち同じ領域の美容の専門家であれば、だれが問題を採点しても同じ結果が得られる性格を持つものである。その意味では、客観性は信頼性を決定する際に、特に重要な条件である⁶⁾。4番目として個別性があげられる。個別性は対象のニーズに対して、個々の能力が表出される。この能力は生活行動が持つ多様性の理解を前提として対象者との連携を含めて成立するものである。

この点においていえば、確かに美容行為は、顧

客の個人的な背景を熟知・考慮して、美容技術者が専門的技術を提供することで成立する。この場合、美容の専門技術とは、実施しようとしている技術の原理・原則的技術と、それを対象者の条件に合わせて適用する変換能力とってよい。以上4つの伝統的評価に新たな評価基準を設定し、美容の現場での実践の一連性のある授業形態をシミュレーションし、当てはめていく。そしてこの一連作業による確かな美容実践能力の実現に向けた学習者のスキルを的確に把握するための評価方法や評価基準の開発を行っていく。そこで上記でとりあげた4つの伝統的評価に加え、新たな評価基準として、現在注目されてきている「真正評価」をとりあげる。この真正と命名されている理由は教育評価を行う状況や課題が実生活を反映しているということの意味している。美容実践実習（現場の多様な状況をシミュレーションした学習形態）の中での評価として真正評価を採用し、考察・検討を試みていく。

この真正評価は、その特徴のひとつとして、学生の設定される「目標」が、「活用」のレベルにまで相当するところにある。つまり、学習者が職場や実生活で体験する場面の中で評価が実施されていく。職場や実生活で生じる課題には、この公式で解こうとする前に、どの公式が使用できるのかを判断して、そのために必要な情報を選り分ける思考が求められる。そこには、実践に即した確かな学力が学習者の中にどの程度実現されているかを的確に把握するための評価方法と評価基準の開発が必要である。確かな学力の形成を促す実践教育評価の考え方や方法のひとつとしての評価法にパフォーマンス評価がある。このパフォーマンス評価の評価基準には、ルーブリック（評価指導）が設定されている。思考力や表現力といった高次の学力を評価するためにはそれにふさわしい評価指導法を開発していく必要がある。この評価開発のメルクマールとして注目される真正性評価は、実際の文脈に即して評価課題を提示するもので、そのうち、とりわけ学習者の「行動」や「作品」の評価に注目するのがパフォーマンス評価で

ある⁷⁾。例えば、「美容師となって、顧客のカウンセリングや施術のシミュレーションを演習として行う」授業形態を提示していく際に重要であるのは、実践場面の中でいかに評価の基準を明示し、評価としての客観性や信頼性を確保するかである。この難題を突破する試みがルーブリック作り（評価指標）である。このルーブリックは常に仮説的な性格を持っていて実践の中で作り替えられていく性格をもつものであり、学習課題に対する学習者の認識活動の質的な転換点に規準を合わせて段階を設定しようとする試みである。どのように活動を改善すれば良いのか等、教員と学習者間で段階的に問い直されていく。そして、結果的に学習者の活動や自己評価の指針的役割を持つものに作成していくことで、実践授業を通して反省と改善を促すものとなる。このように長期的な見通しを併せもった評価活動である。そして結果として、実践の中で習得した体験を活用することで、目標到達のラインもベース化されていくと想定される。このように真正評価はポートフォリオ評価と並んで、多様な状況に応じた学力評価法として、提起されている。

このように、現在の教育の現場においてその変化とともに、評価基準においても、多様な評価判定基準モデルが提唱される中で、本稿では、今後の教育評価活動の具体的検討評価基準として、グーバの提唱する「応答的構成主義的評価」について着目し、その考察と検討を試みる。評価の規準においても相互作用をとおして社会的に構成されるというグーバの提唱する「応答的構成主義的評価」の考え方を前提として、教授側と学生側との相互作用の中において分析、批判を繰り返す、その中から新たな構成物を作っていくという評価方法論に着目する。そこに、筆者の論文「美容師養成教育における実践教育授業案の構築に向けて」⁸⁾で提示した美容実践授業や、作品の制作の段階に記録していくワークブックやポートフォリオ、プレゼンテーションブックに至る記録行為のプロセスを当てはめ、考察を試みる。このグーバの提唱する「応答的構成主義的評価」については、具

体的にどのような規準を用い、その妥当性や客観性は適切であろうか。グーバはその規準として真正性規準という諸規準を採用しており、この規準によれば、「構成主義自体の基本的前提から、直接的に導き出されるものである」として5つの真正性規準項目を挙げている。①番目には公平性であり、評価のプロセス内で、異なる構成物とそれら構成物の根底にある価値構造をみる規準である。つまり学習者の深い考察やその制作によってもたらされた構成物それぞれが価値を持ちそれが受け入れられていく公平性規準を示している。②番目は存在論的真正性であり、個々の学習者自身が制作した構成物が、省察し、改善され、拡張され、精緻化され、その結果として、より洗練された構成物になっているかどうかをみる規準であり、個々の不完全な構成物を、より完成度の高いものに向けて常に再構成されつづけていくことで、存在論的真正性が保証される。③番目として教育的真正性で、ステイクホルディング・グループの外側にいる人々の構成物に対して、個々の学習者がそれを理解し評価しているかをみる規準である。ステイクホルダーは、少なくとも、自身とはまったく異なった人々の構成物に向き合う機会をもつこととされる。そうすることによって、評価者を取り巻く争点に対するまったく異なった解決策を学びとることができるからである。即ち、自身の構成物だけでなく、他の構成物に目を向け、そこから学ぶことで教育的真正性は高められるとしている。このことは今後、筆者の論文「美容師養成教育における実践教育授業案の構築に向けて」で示したプレゼンテーション学習と関連づけていく。④番目として触媒的真正性であり、評価のプロセスによって、人々の行動は刺激され、促進させられているかをみる規準である。評価の目的は、評価結果に基づき、人々が行動するようになり、意思決定するようになることである。評価は、人々の次の行動に向かわせる実質的な機能をもつものでなければならないとしている。⑤番目として戦術的真正性があり、評価は触媒的真正性だけでなく、つまり、人の行動を駆り立てるだけでなく、

行動が実施されているかどうかの規準である⁹⁾。以上の規準が、評価の適切性を判断する規準として提示されている。この構成主義的真正性評価の特徴のひとつには、評価を行っていく者の意識などにも焦点があたっているところにある。このようにグーバの提唱する「応答的構成主義的評価」は、評価の妥当性・信頼性というよりも、それ以外の規準に言及した論といえる。それでは、このグーバの真正性評価の視点で、新たな美容実践教育における評価方法を議論していくことは意義あるものと考え、この規準の導入についての検討を実践プログラムより試みる。

美容実践プログラムによる考察

美容技術の際にもっとも基本となるものは、技術を行う際の「姿勢」である。このことは美容技術理論の序章において明記されており、そこに異論はない。すなわち、美容の基礎的技術の内容の構造を「基本動作」から、評価規準としていく視点をもつ。この基本動作の定義を、美容技術を習得するために部分練習することが望まれる動作のまとまりとなるような美容技術の構成要素と考える。基本動作は姿勢を含め、原理・原則などの認知領域の内容及び顧客への配慮などの情意領域の内容に裏づけられたものである。既習した基礎的技術の基本動作を多く含む技術の学習過程では、それらの活かし方を確認し、次の技術の学習を容易にすることに役立つ。したがって、基本姿勢や動作によって構成された美容技術は、必然的に作業効率がよいものとなる。作業効率がよいということは、無駄な作業を省くことでもある。また動作（パフォーマンス）は、表現する行為そのものでもあり、鏡を目の前にして施術を行っていく美容専門職としての重要な技術でもある。

そしてこの基本動作にはじまる一連の美容技術の流れを組み立てて、実施順序などシミュレーション化していく。

1	カウンセリング [5分] (コミュニケーション力)	①自己紹介	A/B/C
		②話を聴く (問題認識・把握)	A/B/C
		③技術的・心理的パフォーマンス	A/B/C
2	基本動作・姿勢 (表現力と関連づける)	①基本姿勢	A/B/C
		②肘・膝・腰の使い方	A/B/C
		③目線での作業	A/B/C
3	基礎的技術課題 [20分] (国家実技試験評価に基づく)	①カットイング	A/B/C
		②パーマメントウェーブ	A/B/C
		③オールウェーブ・アップ等	A/B/C
4	仕上げ [5分] (創造力と関連づける)	①スタイリング	A/B/C
		②セット・ブロー等	A/B/C
		③創造性 (カウンセリング時との整合性含)	A/B/C
5	リフレクション [5分] (リフレクションノート使用)	①反省点	A/B/C
		②改善点	A/B/C
		③論理的思考性	A/B/C

図1 美容実践プログラム評価案 [仮]

美容技術の重要な点として、一つひとつの項目ができれば実践力が身についたといえるものではない。卒業時の技術修得度と実践現場とのギャップを埋めていくには、一連の演習強化と実習と技術理論の連携が不可欠となる。リアリティある事例や実践現場での場面設定、その際の技術の統合と活用、模擬授業の活用等、考慮したうえで学習者が実践授業をイメージできる状況設定を工夫し、シミュレーション化した。(図2)

このように美容実践教育の事例をプログラムに取り入れシミュレーションし、(真正評価の視点・導入・展開・検討) 状況設定により顧客の状況を判断し、知識と技術を統合して顧客への施術・援助を備えた実践演習を実施していく。

授業形態は具体的に、顧客役の学生に事例を渡し、教員の指示に従い台詞を述べるように伝える。一斉にスタートし、1人約30分で実施する。実施したところで振り返り(リフレクション)を行うプロセスを踏む。

1課題の所要時間は約30分(課題把握5分、試験20分、フィードバック5分) 評価は1課題1クラスにつき、教員4名とする。評価項目は1課題につき3項目～5項目を設定し、計15～25項目に評定基準を設けそれをもとに三段階で採点していく。このプログラム演習は、1、2年合同の試験により、普段接することの少ない学生間で、各ブースで異なる状況を設定してもよい。その際、

授業の中で実践的に行うことに対する葛藤を交える。このことは、各自の実践的活動を協同作業の中でいかにして共有するかについて困難さを感じるということを示唆するかもしれない。同時に、自らの実践について、活動自体の中でどのように位置づくのかについて省察していくことを示唆するものと想定される。

また、状況判断や対応を多面的に検討するという手続きにより、学習者の所感が授業期によってどのように変化するのか、また、学習者の所感に関連する要因はどのようなものなのかを検討することも忘れずに行う。その後、リフレクションノートに「期待したい自己の認識・行動の変化・体験したことで気づいたことをどう考え、どのように変えていきたいと思いますか」「自分のなかでどのような変化が起きましたか」等の問いを設定し、後のポートフォリオの資料としていく。この際に、学習者の省察過程を的確に把握することができる評価観点や評価軸を見つけ出すことを考案することが求められる。それには、できるだけ学生自身が活動内容に関してモニタリングを行うことで、自らのために重要だと考える要因を言語活動によって顕在化させることが重要となる。単なる科目の評価試験に留まらず、学生個々の実践能力到達度に対する客観的評価として、毎年、学生にフィードバックしながら、最終的に卒業時における学生の到達度を明らかにすることを視野に

事例 A のケーススタディ：先月、別のサロンでパーマントウェーブをかけたが、満足できず、当サロンに初来店。その顧客にデザインパーマを施す。

[学習者に配布する事例]

〇〇 〇様 45歳 女性 パーマをかけた経験は過去に3度、本日希望のスタイルの切り抜き写真を持参。

使用ロッド：15ミリ～8ミリまで

薬剤：システイン

※試験時は水を使用

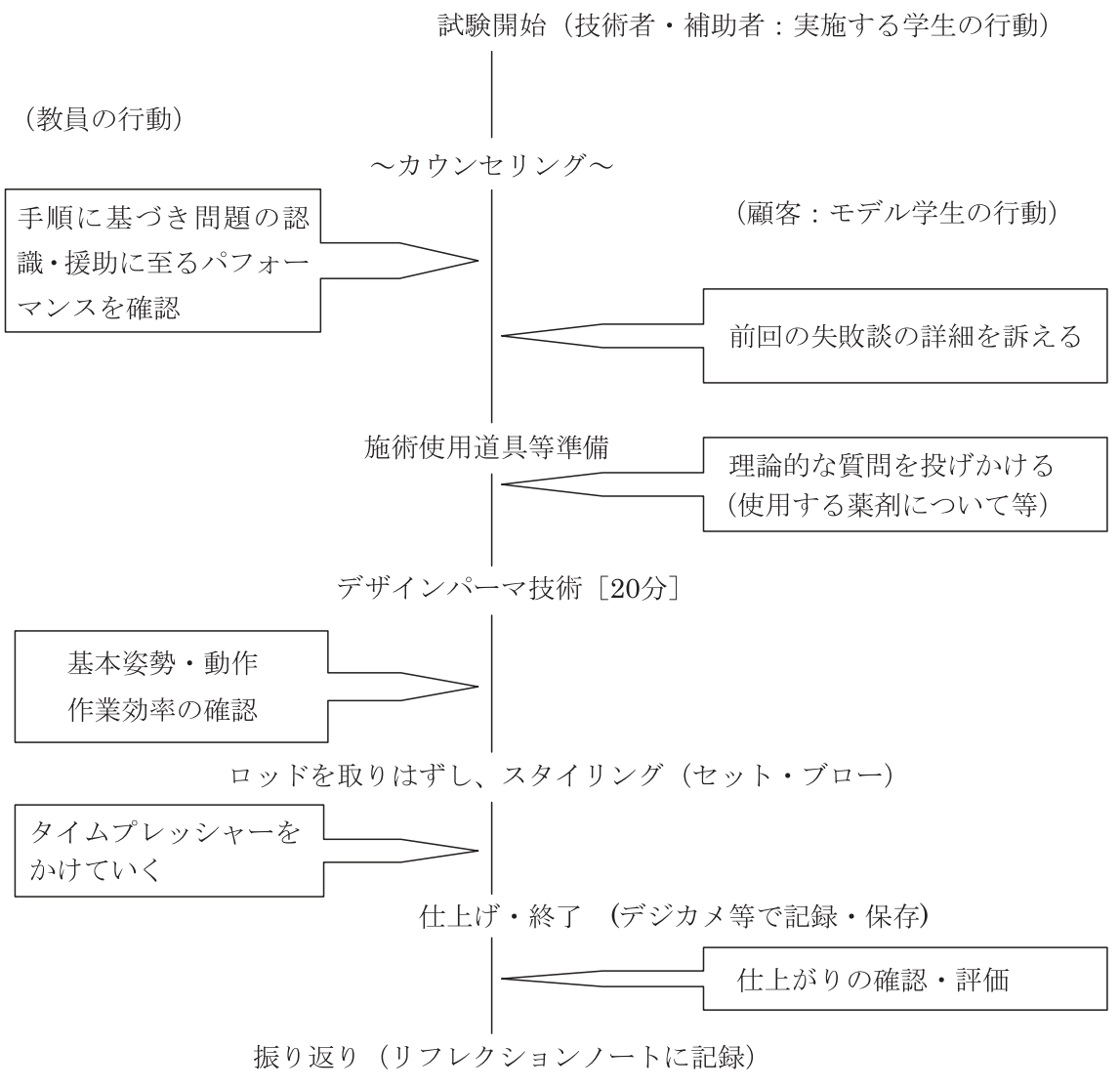


図2 美容実践プログラム進行例 [仮]

いれてもよい。そして、そこにポートフォリオの有効性が発揮されると考えられる。但し、これらを達成していくためには、前提としてその美容教育理念や、教育目的、具体化するカリキュラムとの整合性が前提となる。

ポートフォリオについて

ここでポートフォリオについて概観する。もともとポートフォリオとは一般的に「書類などを入れる鞆や紙ばさみ」をその語源としており、鞆の中に入っている書類を扱うという意味を持っている。つまり情報の一元化を目的として作成されるファイルのことを意味し、これが後に、投資家の資産管理や、建築家の業績証明において使用されるようになった。このようなポートフォリオの活用の広がりが教育界においても注目されている。授業内におけるポートフォリオの形態については、社会構成主義の学習観を基に、ロンドン大学のクラークを中心に考察され、量的評価の限界に伴う質的評価へのシフトを背景として英国や米国で発展している。前述したように構成主義的学習観は、学習者が過去の学習経験や生活体験で得た既知なるものを確認することから始まり、その既知なるものと未知なるものとの間で学習者自身がどのような葛藤を引き起こしたかについて認知するプロセスをたどっていく。つまりこのような既知と未知との往復のプロセスの中で、どのような納得の仕方で行ったかによって再確認がなされる。自己の経験に関する個人的な理解を、構成する能動的な行為者としてさまざまな学習環境の中で相互作用しながら学習していく構成主義論は、デューイなども代表的提唱者として挙げられる。

ポートフォリオファイルの作成過程には、資料全体を見通す俯瞰による内容の再構成としてのパーマnentポートフォリオを行い、他者とのプレゼンテーションや、思考の拡大を図る機会を組み合わせ、自己の期待する結果につなげていく学習プロセスを構築する。ファイルは個別作成で、つま

り自己の気づきや省察、関心事に関わる学習過程をたどれるように設定していき、のちの卒業論文の資料収集や材料としていくことができる。また、さまざまな段階で試行錯誤したことを記録として残すことで思考の連続に役立つ。それに加え、自己評価を客観的に行いやすいことも特徴のひとつとなっている。これらの特徴をもったポートフォリオを大きく3つの枠で捉えると、

- ① テーマポートフォリオ：学習・研究課題・卒業論文などの達成のためのポートフォリオ
- ② パーソナルポートフォリオ：個人の経歴・関心・蓄積過程のポートフォリオ
- ③ ライフポートフォリオ：採用試験の自己PR用・将来設計を視野にいたしたポートフォリオ等に分けられる。

このようにポートフォリオは、集められた情報の中から目的に沿った情報を抽出する過程において学習者の省察を生起させる。近年では、省察の概念は構成主義の中心概念として位置づけられている。つまり、ポートフォリオは教育実践に関する振り返りを促す手段である。このようにポートフォリオは80年代以降の構成主義の台頭に伴って学習の過程を認識するための手段の一つとして考察された記録物であり、その根底には、自己学習による省察の概念が位置づいている。ポートフォリオが美容実践教育における学習においてその実践力を有効に発揮する為には、①ポートフォリオを用い、美容業種に関わる必要かつ、重要な情報選択をしていく。②ポートフォリオを作成するにあたり、より開発的に発展させていくこと。③今後の美容職において、その記録を履歴や就職の際の自己PRなどの実践の場で有効性を発揮すること等をあげることができる。このようにポートフォリオの特徴は、「情報収集能力」「省察」「コミュニケーション力」を内包し、その結果としての自己評価を含む「評価」を循環的に継続的に行うことでその効果が発揮される可能性を有するものとなる¹⁰⁾。

おわりに

本論で考察した美容実践プログラム演習の効果は、講義で学んだ知識を演習で実施すると同時に、実際の現場に近い環境下での体験により、既存の知識を組み合わせて実践可能にすることにある。この授業システムを通じ、直接的な経験のなかから意味を見出し、省察的経験へと踏み込んでいく足がかりとなる。そして学習者側はこの授業により、客観的に自己を評価し、その成長を確認し、今後に向けた自己の課題を明確にしなが、美容実践能力を確実に積み上げていく。このようなりアリティのある学内演習、卒業後を意識した学内演習をカリキュラムに導入し、評価基準を設定していく意義は大きいものとなる。美容の技術的理論での推論は困難な部分があり、その理論を基に体験を積み重ねていく実践実習のなかで感覚が培われ、知識を獲得し、判断基準として身につけていくものとなる。机上の技術理論知に基づいて実践現場で可能な実践知が想起され、基礎的な知識をどう吸収させていくのか、その動機づけとしての美容実践演習の位置づけは大きい。知識は行為を導くとともに、行為からでてくるものである。実践的経験によって記憶として蓄えられた統合的知識に基づいて再組織化された感覚が、感性の源を形成しているという教育的な視点をもつことで、美容実習とリンクさせた本演習は実践知を形成する過程に有意義な経験をもたらすと考えられる。このように、実践的技術教育においては「気づき、感受する能力」の育成が不可欠であり、卒業後の即戦力を射程とした、また記憶に残る学生自身が実感する体験の機会を提供するものである。そして、学生個々の美容実践能力を具体的・客観的に評価する実施後の到達度評価は、それに取り組んでいる教員、学習者を含む教育現場で解決すべき問題の所在を明確にしていくものと考え。それには、美容実践能力を問う上で美容技術チェックリストの評価基準を明確にしていく必要が今後重要な課題となる。そのため美容の現場で活用しう

る「美容実践能力につながる基礎的技術」のミニマムエッセンシャルズの評価の基準を検討していくことが課題となる。本論でこれまで述べてきた構成主義的評価システムを中心とした評価研究は考察・検討に留まっており、今後立証にむけた取り組みを行っていく考えである。

註

- 1) 村上陽一郎「アカウントビリティー」『imidas2002』集英社、2002、p.1056
- 2) 中央教育審議会第67回総会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」文部科学省、2008
- 3) 佐藤学『フィンランドの教育の優秀性とその背景—PISA 調査の結果が示唆するもの』教育科学研究会、2005、pp.34-43
- 4) B. S ブルーム他編著、梶田叡一訳『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価』第一法規、1976、p.8、p.89、p.125、p.162
- 5) 南風原朝和『現代教育評価事典』金子書房、1988、p.402
- 6) 同上、pp.343-344
- 7) 田中耕治『教育評価』岩波書店、2008、pp.16-24
- 8) 富金原光秀「美容師養成教育における実践教育授業案の構築に向けて」『小池学園研究紀要』第8号、2010
- 9) 北川剛司「教育評価における妥当性・信頼性に関する考察」広島大学教育学研究科紀要、第3部、57号、2008、pp.102-103
- 10) 寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる—FD・評価・私学—』東信堂、2006、p.112

参考文献

- 1) 田中耕治「教育目標論の展開—タイラーからブルームへ」『京都大学教育学部紀要』vol.29、1983
- 2) 田中耕治編著『よくわかる教育評価』ミネル

ヴァ書房、2005

- 3) 田中耕治編著『人物で綴る戦後教育—評価の歴史』三学出版、2007
- 4) 神野直彦『教育再生の条件』岩波書店、2007
- 5) 文部科学省 ホームページ <http://www.mext.go.jp/> 2011.2.11
- 6) OECD 東京センター <http://www.oecdtokyo.org/> 2011.2.11
- 7) 宇沢弘文『日本の教育を考える』岩波新書、1998
- 8) 富金原光秀「美容師養成教育における実践教育授業案の構築に向けて」『小池学園研究紀要』第8号、2010
- 9) 佐藤学『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ』世織書房、1996

(東萌ビューティーカレッジ専任教員 富金原光秀)